

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. II, 2005

仙石山論集 第2号 (平成17年)

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について

林

敏

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について

林 敏

一、はじめに

筆者は第五十五回印度学仏教学会学術大会の発表において、『照明菩薩經』が支謙の訳した『八師經』の偈文を受容したことを明らかにした。ところで、『照明菩薩經』と共通する本文を有する偽疑經典『妙好宝車經』にも『八師經』の偈文が見られる。『八師經』、『照明菩薩經』、『妙好宝車經』の三者がどのような関係にあるのか、本稿では特に『照明菩薩經』と『妙好宝車經』の前後関係を中心にして報告するものである。

二、テキスト

(一) 『照明菩薩經』のテキスト

A. 写本（敦煌写本）

李盛鐸旧藏敦煌写本は現在所在不明であるが、羽田記念館所蔵の『羽田亨博士収集西域出土文献写真』によってほぼ概要が把握される。

B. 活字本

筆者は、右記の写真を書写された落合教授のノートをもとに『照明菩薩經』の翻刻文を作成し、『仙石山論集』第一号に掲載している。^②

(二) 『妙好宝車經』のテキスト

本テキストに関しては牧田諦亮博士が『疑經研究』^③に北魏の庶民經典の一例として『妙好宝車經』（牧田博士は『宝車菩薩經』と称されている）を詳しく説明し、テキストについても言及されている。最近、台湾中正大学中文系の蔡榮婷女史が、俄藏本六六六号を発見されている。従って、『宝車菩薩經』のテキストは以下の五本となる。

A. 写本（敦煌写本）

① 書道博物館蔵（中村不折旧蔵）本

書道博物館蔵の書画家中村不折（一八六六～一九四三）氏旧蔵の『妙好宝車經』敦煌写本は『大正蔵』所收本の底本である。牧田博士は、中村不折著『禹域出土墨宝書法源流考』^④を引用してこの敦煌写本が首欠であり、六紙八尺九寸に及ぶ残巻と書かれている。この紙数は牧田博士が言及されているように日本の古記録と一致する。すなわち『大日本古文書』巻七の正倉院文書、天平三年（七三二）八月十日の書写記録の中に、

一七妙好宝車菩薩經一卷 用六

（『大日本古文書』巻七。東京大学出版会。明治四十年。一七頁）

とある。書写に要した紙数は「六紙」である。これによって中村不折の旧蔵敦煌本が巻首の僅少部分だけを欠い

ていることが推察される。

また、『禹域出土墨宝書法源流考』には跋文の一部の写真が載っている。

大業十三年仏弟子張仏果為劉士章善友知識敬造宝

車經一卷流通誦講説修行願藉此大乘弘化之

とあり、中村不折氏は「優雅豊勻」の隷書体で、「跋文ノ細字殊に妙ナリ。」と評している。

② 四天王寺出口常順氏藏本

これは大阪四天王寺の第一〇一代管長出口常順氏所藏のものである。氏はトルファンより出土した一三〇点の写本・刊本の断片を昭和二十年に入手して、昭和三十五年に京都大学人文科学研究所で敦煌写本の共同研究を主宰していた藤枝晃博士に委嘱したという。昭和五十三年に、藤枝晃博士が『高昌残影——出口常順藏トルファン出土仏典断図片録』^⑤を編集出版した。その中の二三二番の写真が「宝車菩薩經・觀世音折刀除罪經合卷」である。本書の解説と積録が最近出版された。この藤枝晃博士編『トルファン出土仏典の研究——高昌残影積録』^⑥の中に翻刻文が出ているが、資料集成の観点からその積録を参照しながら、筆者なりの翻刻文を作成してみた。翻字、読みにおいて根本的に異なる箇所はない。

本写本の書写年代については藤枝晃博士が唐の楷書に分類されているので今はその説に従う。

写真より判断する限り、この写本は二つの紙を張り合わせた断簡である。第一紙には十行あり、第二紙は二十行にわたって書かれている。写本の後半の十八行から三十行までの十三行は『觀世音折刀除罪經』である。写本の前半の一行から十七行までの十七行に『宝車菩薩經』が書写されている。「□不知□：」から「歡喜奉行、作礼而去」までと尾題の「仏説宝車菩薩經」を併せて十七行、字数二一〇文字である。これは『大正藏』八五卷一

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

六

三三五頁中段一行から十七行に相当するものである。

③ ペリオ本

ペリオ収集敦煌本の P257⁷は、『敦煌写本目錄』^⑧によれば『妙好宝車經』であるという。表面は『律戒本疏』であるが、裏面は六種の異なった写本の連写より成り立っている。すなわち、一、法身礼。二、仏説妙好宝車經。三、大般若波羅蜜多經。四、礼懺文。五、大涅槃經。六、梵網經述記等である。二九葉と二八葉の裏側の二七行から五二行までが本經である。これは『大正藏』八五卷一三三五頁上段十五行から中段十七行に相当する。なお、『敦煌写本目錄』には本写本の書写年代に関する記述はみられない。影印本には上海古籍版と台湾新文豐版^⑨がある。

④ 俄藏本

俄藏本六六六号は、『メンシコフ目錄』^⑩によれば、九一十一世紀に写されたもので、首尾を欠き、破損ならびに不明字も若干見られる、僅か一紙の断簡写本という。經文は「入大海……」から「惡漸欲忍辱作涿斫卻」まで併せて十八行、二〇五文字であるが、これは『大正藏』本の一三三四頁下段の十七行から一三三五頁上段の六行までに相当する。

B. 活字本

『大正藏』八五卷所收。大正二八六九番。底本はAの①（書道博物館藏敦煌写本）。この『大正藏』所收本『妙好宝車經』には翻刻時の誤りと想定される箇所が見られるが、確認出来ていないので判断は留保する。

三、『妙好宝車經』について

『妙好宝車經』は『宝車經』・『仏説妙好宝車經』・『妙好宝車菩薩經』・『宝車菩薩經』とも称される。僧祐(四四五―五一八)の『出三藏記集』巻五の「新集疑經偽撰雜録」では、北国の淮州(河北省内)の比丘曇弁が撰し、比丘道侍が改訂を加えたとしている。本經は散逸したが、隋の大業十三年(六一七)の奥書のある敦煌写本が発見され、中村不折氏が購入した。現在は書道博物館に蔵する。『大正藏』八五巻に収録されたが、首尾完結ではない。約二八〇〇字を有する断簡である。本經は、一言で言えば人天教¹²⁾の經典であり、その意味で庶民經典と言ふことも可能である。以下、内容梗概から検討していく。

(一) 内容梗概

本經は序分の箇所を欠いているが、その構成は、伝統的な序分・正宗分・流通分の三段を有していたと見てよいだろう。登場人物は宝車菩薩と仏、そして一人の比丘と一人の婆羅門である。

まず、仏と宝車菩薩の仏法問答の形式で、その内容は、仏道は至尊であり、もし本經を聞知すれば、種々様々な現世の利益を得ることが出来る。如来の寿命は日月のように不可思議である。三帰依・五戒・十善・八斎を受持すれば、諸有漏を尽くし、須陀洹等四果の道を得ることが出来る。逆に本經を誹謗すれば、地獄に墮ちるといふ。

次に、偈頌が続く。煩惱の根源は愛性であり、愛を断じれば、煩惱がなくなり、三帰依・五戒・十善・八斎・直心・懺悔・精進を行えば、地獄へ墮ちず、種々様々な苦難を避けられるという。三帰五戒、十善八斎の在家の

戒の重要性を強調する。

つづいて長行文になる。仏が宝車菩薩に説く。齊日に三尊の前で発露懺悔すれば三途に墮ちることなく、八難の苦を受けることもない。本経をよく受持すれば、快樂は自在に、功德は無量に得られる。また般若（波若）の智慧の灯火と善権方便を攻め車として、衆生の無明の暗宅とその愚痴・五陰・煩惱・生死の賊を撃破して法身道場に入ることができるといふ。そして、菩提心を発して本経の名を受持すれば、地獄に墮ちないばかりか如来十力と般若の大船に乗り、生死・煩惱・愛欲・無明・邪見の衆生を度脱して、涅槃の真実果を取得すると説く。

その後、再び偈頌がある。生きものを殺し、魔神に福等を求めば、罪は須弥山のように大きい。老・病・死の苦を度脱すれば、福の生じる涅槃道を求められる。眼・耳・鼻・口・心・身の六処を欠けば、仏法を得ることが難しい。衆生を殺し、五欲に執著し、身心を放逸し、戒を受けなければ、その罪業によって地獄に墮ちることになる。本経を受持して、直心を実践し、戒を受ければ、八難を避けることができる。

さらに、長行文がつづく。比丘が四諦・十二因縁について、寶車を経て仏に尋ねていると、仏、答えて、三乗の者は涅槃の道を知らないから、六道のなかを輪廻し諸の難を脱出することは難しいが、方便の力を引き、三乗を破して一乗に合す、一乗の涅槃に入れば、粟果が天地に成り、芥子が須弥に成るような不思議な神力を持つことができ。千万億の宝車菩薩の眷属は仏の教えを喜んで奉行し、一心に帰依する。

最後に縁起の長行文がある。仏が一人の道人に変装して、婆羅門の家に詣でる。そこで、心田の開発が説かれる。私の耕作とあなたの耕作とは違い、四禅をもって耕犁とし、六度を種子として、無極の曠野に散らし、八解の泉水で潤し、四実（須陀洹等）を長養することを果報とし鋤やすに十善を以って溝壑とする。道人の田は有限なものではなく無窮の心の仏性を開発するのである。

以上のように本経の思想内容は種々様々であり、『八師經』・『法句經』などの小乗經典と涅槃・般若・法華・

華嚴・維摩などの主要な大乘經典から影響を受けていることは明らかである。本経を分類するとすれば、善惡報応の思想によって罪を懺悔して戒を守り、福を求める人天教に属する。しかし、本経の最終の目的は仏の一切智の涅槃の眞実境地に至ることである。方便の三乗宝車を制御して、最後に一乗の妙好大白牛車に乗り、法身道場に入れば、涅槃仏果を得ることができるといっているのである。

(二) 先学の研究

先学の研究は、まず、塚本善隆博士の「中国の在家仏教特に庶民仏教の一經典——提謂波利経の歴史——」研究¹³は、博士が指摘されているように、『宝車経』は、「諸の衆生を教えて普く皆、三帰五戒十善八齋即ち在家の戒を受持せしめよ」と説かれたとするものであって、これを受持すれば、天に生じ受樂無窮となる。これに反対すれば、地獄の苦をうけること極まりなしとし、そして、地獄や死後の審判庁が東太山と結びつけられていたと述べられている。中国泰山信仰に仏教の地獄や応報転生の信仰を結びつけたものであるという。次に牧田諦亮博士は『疑経研究』の中で『宝車経』のテキストと内容を詳しく考察されている。つづいて、鎌田茂雄博士は『中国仏教史』第四巻に、『宝車経』を紹介されている。この経は心田を開発することを説いたものであると述べられている。¹⁵最近、台湾中正大学中文系の蔡榮婷女史が文学面から研究されている。女史の「敦煌本『説妙好宝車経』研究」で、ペリオ本 (P2157c) と俄藏本と大正藏本とを比較して詳しく紹介している。¹⁶なお、胡適博士が詩の面から本経を考察していることは興味深い。特に、「これは五世紀末葉に出来経であり」、「この種の韻文では中古時代にあつて非常に流暢的なものといえる」と評している。¹⁷

以下、経録から検討したい。

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

(三) 経録からの考察

経録には次の九点に『妙好宝車經』の名が見られる。

A. 『出三蔵記集』(五一〇～五一五) 録下卷第五积僧祐撰「新集疑経偽撰雜録第三」

宝車經一卷(或云妙好宝車菩薩經)

右一部。北国淮州比丘曇辯撰。青州比丘

道侍(或は侍)改治(『大正蔵』五五卷三九頁上二六～二八)。

B. 『歴代三蔵紀』卷第九(訳経西秦北凉元魏高齊陳氏)開皇十七年(五九七)翻経学士臣費長房

宝車菩薩經一卷(一名妙好宝車經)

右一部一卷。齊武帝世。元魏淮川沙門积

曇辯出。後青州沙門道侍改治。訪無梵本。世

多注為疑。見三蔵集記及諸別録(『大正蔵』四九卷八五頁中二九)

C. 『法経録』(五九四年)卷四 衆経偽妄六 合五十三部九十三卷隋沙門法経等撰

妙好宝車經一卷(一名宝車菩薩經。旧録稱淮州沙門曇辯撰。青州道人道侍 治)(『大正蔵』五

五卷一三八頁下七)

D. 『仁寿録』(六〇二年)卷第四 隋翻経沙門及学士等撰 五分疑偽

好好宝車經一卷(一名宝車菩薩經。旧録稱淮州沙門曇辯撰。青州道人道治)(『大正蔵』五五卷一

七四頁中一二)

E. 『静泰録』第四 「衆経疑惑五 合二十九部三十一卷」

妙好宝車經一卷(一名宝車菩薩經。旧録稱淮州沙門曇辯撰。青州道人道侍治)(『大正蔵』五五

F. 『大唐内典録』(六六四年) 卷四 「梁朝伝訳仏経録第十二」

宝車菩薩經(一云妙好宝車經)

右齐武帝世。元魏淮州沙門釈曇辯出。後

青州沙門道侍改治。訪無梵本。世多注為

疑。見三藏集記及諸別録(『大正藏』五五卷二六八頁下七)

また内典卷十 歷代所出疑偽経論録第八

宝車經(或加妙好字。淮周曇辯撰。青州沙門道侍改治)(『大正藏』五五卷二六八頁三四中一七)

G. 『大周録』(六九五) 卷十五 大唐天后敕仏授記寺沙門明佺等撰 偽目錄

妙宝車經一卷(淮州比丘曇靜撰)(『大正藏』五五卷四七三頁中六)

H. 『開元録』(七三〇) 卷第十八(別録之八) 智昇撰 別録中偽妄亂真録

宝車經一卷(或云妙好宝車經北国淮州沙門曇辯撰青州比丘道侍改治)(『大正藏』五五卷六七四頁

上二一)

I. 『貞元新定釈教目録』(八〇〇) 卷第二十八。圓照撰別録中偽妄亂真録第七

宝車經一卷(或云妙宝車經。北国淮洲沙門曇辯撰。青州比丘道侍改治)(『大正藏』五五卷一〇一

頁下五)

以上の経録からみると、本経が最初に現れる経録は僧祐の『出三藏記集』である。『出三藏記集』は一般に天
藍年間の五一〇年から五一五年にかけて成立したと言われているので、本経の下限が確定する。

『照明菩薩経』と『妙好宝車経』について(林)

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について(林)

七〇

さらに、『歴代三宝紀』(長房録)に書かれているように『妙好宝車經』が齊武帝世に撰述したのを信用すれば、齊武帝の治政(四八二〜四九三年)中に撰述したとなっているが、長房録をどこまで信用するか、いまだ明らかになっていない。しかし、道宣は『大唐内典録』にそのまま引用しているので一応これを信用して論を進めたい。もとより、『出三藏記集』に撰者名と加筆者の名前が現れるので経録からの成立年代考証はさしたる意味がないとも言える。真経か疑経かという問題については参照するに足り得るものである。どの経録もみな偽疑経典として位置付けている。

さて、『出三藏記集』に見られる次の記述を考えてみたい。

北国淮州比丘曇辯撰。青州比丘。道侍(或は侍) 政治。

まず、北国は北魏と見られるが、淮州は百納本『魏書志六』地理によれば、

淮州・蕭衍置、魏因之、治淮蔭城。(百納本『魏書』一〇一〇〇頁)

さらに、『宋書』卷九五、列伝第五五にも、

剪我淮州、俘我江隄(百納本『宋書』七二〇二頁)

そのあと、『隋書』卷三十 志第二十五 地理中 淮安郡によれば、

淮安郡後魏置東荊州、西魏改為淮州。開皇五年又改為頭州。(百納本『隋書』一一五八頁)

とある。南北朝時代、特に劉宋時(四二〇〜四七八年)或はそれ以前に中国の北方にある地名である。僧祐の地名の記述を傍証することができる。

次に、比丘曇辯は、宋書列伝卷六十八、列伝第二十八、文二王、彭城王義康に

「六子、允・肱・珣・昭・方・曇辯。允、初封泉陵侯、食邑七百。昭・方並早夭。允等留安成、元凶得志、遣殺之」(百納本『宋書』六八卷。六六七四頁下)

とある。また『高僧伝』卷十三に

「釈曇辯（一往無奇。弥久弥勝）……凡此諸人。並意齊代知名。其浙左江西荆陝庸蜀亦頗有轉読。然止是當時詠歌。乃無高譽。故不足而伝也。〔『大正藏』五〇卷四一頁下〕

とある。蔡榮婷女史はこの記録によって、『妙好宝車經』の撰者と同人物と判断しているが、それは¹⁸⁾『妙好宝車經』の撰者と同人物かどうか、判断し難いと筆者には思われるが、北魏の淮州の比丘曇辯が撰述し、その後、北魏の青州の比丘道侍が加筆したことが明らかになってくる。

（四）『妙好宝車經』が典拠とする経論

本經の思想内容は種々様々であるが、前述したように善惡報応の思想によって三帰依五戒八齋十善を受持して、戒律を守り、方便の三乘宝車に乗り、さらに最後に一乘の妙好大白牛車に乗って法身道場に入れば、涅槃仏果を取ることができるというものである。『法華經』や『維摩經』の文言、また支謙訳『八師經』や『法句經』などの経典からの思想内容の影響を受けていた。

つぎに具体的に二、三例を示したい。

A. 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』（四〇六¹⁹⁾）を典拠とする箇所

「譬喩品」（傍線は同一の部分を示す。傍点は類似の部分を示す。下同）

a…我有種種 珍玩之具 妙宝好車

b…羊車鹿車 大牛之車 今在門外（『大正藏』九卷一四頁中二〇～二二）

b…父先所許玩好之具羊車鹿車牛車願時賜與（『大正藏』九卷一二頁下一六～一七）

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

- b : 駕以白牛（『大正藏』九卷一二頁下二二）
- b : 我有如是七宝大車。其數無量。（『大正藏』九卷一二頁下二七）
- b : 鮮白淨潔 以覆其上 有大白牛 肥壯多力 形體姝好 以駕宝車（『大正藏』九卷一四 頁下一四〇一五）
- b : 以是方便 為說三乘（『大正藏』九卷一五頁上一）
- b : 我為衆生 以此譬喻 說一仏乘（『大正藏』九卷一五頁上五〇六）
- c : 其有誹謗 如斯經典 其人命終 入阿鼻地獄（『大正藏』九卷一五頁中二八〇二九）

これらの文言は『妙好宝車經』の次の文に対応するであろう。

『妙好宝車經』

- a a（尾題）：仏説妙好宝車經（『大正藏』八五卷一三三五頁下三）
- b b : 牽弘誓之大牛。駕三乘之宝車。（『大正藏』八五卷一三三五頁上一二）
- b b : 宝車方便問破三合為一。比丘語宝車、
- b b : 拳意宜大兒（寛）。謂汝三乘人不識於涅槃、輪迴六趣中。脱諸難亦難。
願以方便力引之入涅槃（『大正藏』八五卷一三三五頁中一四）
- b b : 積著三乘之大車。運著無極之大城（『大正藏』八五卷一三三五頁中一九）
- c c : 其有誹謗此經典者死入地獄。（『大正藏』八五卷一三三五頁上一二）

詳細な比較は省略するが、本経名について、牧田諦亮博士が指摘しているように、『妙法蓮華經』譬喩品に言う肥壯多力の大白牛が牽引する宝車から出たものであることが明らかであろう。また大牛は大牛車、三乗の宝車

は三車にあたり、『妙法蓮華經』の影響をうけた經典であることが分かる。²⁰⁾さらに「其れ此の經典を誹謗する者有れば、死して地獄に入る」も『妙法蓮華經』の影響であることが推察される。²¹⁾「破三合為一」という文は三乗を破して一仏乗の教説に合一することを説くものであり、法華經の一乗思想に合致している。

B・支謙訳『八師經』（二二二―二五三年間²²⁾を典故とする箇所

『八師經』に次のような偈頌がある。

念人衰老時 百病同時生

水消而火滅 刀風解其形

骨離筋脈絶 大命要当傾

吾用畏是故 求道願不生（『大正藏』一四卷九六六頁上六―九）

我惟老病死 三界之大患

福盡而命終 氣絶於黄泉

身爛還為土 魂魄隨因縁

吾用畏是故 学道昇泥洹（『大正藏』一四卷九六六頁上一九―二二）

これらの文言は『妙好宝車經』の次の文に対応するであろう。

『妙好宝車經』

念人衰老時 百病同時生

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

七四

水消如火滅 刀風解其形
骨離筋脈絶 大命要当傾
吾欲畏是故 求道願福生
唯念老病死 三界是大患
福盡而命終 棄之於皇泉
身爛還歸土、魂魄随因縁
吾欲畏是故、求道勝泥洹（『大正藏』八五卷一三三五頁中一六一二二）

本箇所については支謙訳『八師經』と『妙好宝車經』は極めてよく相似していることが直ちに分かるが、仔細に検討すると『八師經』の思想的難解さを通俗的に分解した形跡が伺える。例えば、「求道願不生」という「不生」を「求道願福生」に置換している方法である。また、『妙好宝車經』の撰者もしくは書写者が記憶に頼っていた例と思われる箇所は「学道昇泥洹」に対する「求道勝泥洹」である。「昇」を「勝」にしたのは泥洹に勝利するなどという荒唐無稽な解釈ではなく、単に音通であったのであろう。中古音は同音である。

C. 吳天竺沙門維祇難等訳『法句經』（二二四年頃²³）を典拠とする箇所

『法句經』の次の偈頌二点は『妙好宝車經』の次の文に対応するである。

『法句經』

愛之不見憂 不愛見亦憂
是以莫造愛 愛憎患所由

已除縛結者 無愛無所憎

愛喜生憂 愛喜生畏 無所愛喜

何憂何畏 好樂生憂 好樂生畏

無所好樂 何憂何畏 貪欲生憂

貪欲生畏 解無貪欲 何憂何畏 (『大正藏』四卷五六七頁下一五―二一)

非空非海中 非入山石間 (『大正藏』四卷五五九中六)

『妙好宝車經』

愛時不見愛 不見愛亦憂 是以莫造愛

怨憎惡所由 喜中生於愛 愛能生於憂

若能斷恩愛 憂悲即不生 愛喜生於怨

愛喜生怖畏 解無貪欲想 何憂復何畏 (『大正藏』八五卷一三三四頁中一―四)

得聞宝車經 死不入地獄 非空非海中

非入山石間 (『大正藏』八五卷一三三四頁中九―一〇)

以上、典拠と想定される三つの經典について検討してみた結果、『妙好宝車經』は、鳩摩羅什が四〇六年に訳した『妙法蓮華經』、支謙が二二二年から二五三年にかけて訳した『八師經』、また沙門維祇難等が二五四年に訳した『法句經』などの影響を受けていることが明らかとなった。(訳年代に関しては注参照)

四、『妙好宝車經』と『照明菩薩經』の比較

(一) 同文あるいは類似すると考えられる箇所

<p>妙好宝車經</p>	<p>照明菩薩經</p>
<p>切・獄・囚・思・得・出・不。一・切・病・人・思・得・差・不。如・人・在・闇・思・見・明・不。譬・如・慈・母・思・見・子・不。譬・如・遠・行・思・早・婦・不。譬・如・寡・女・思・得・夫・不。譬・如・瞽・人・思・得・行・不。譬・如・貧・人・思・得・衣・不。譬・如・寒・人・思・得・火・不。譬・如・耕・田・思・得・穀・不。譬・如・盲・人・思・見・物・不。譬・如・聾・人・思・聞・聲・不。譬・如・啞・人・思・得・語・不。如・是・種・種。思・之・念・之。仏・道・至・尊・終・不・相・欺。</p> <p>仏・語・宝・車・菩・薩。我・今・語・汝。須・弥・山・南・名・閻・浮・提・西・俱・耶・尼。北・鬱・單・越。東・弗・于・逮・如・是。四・方・衆・生・皆・悉・聞・知・若・欲・聞・者。如・民・得・王。如・囚・出・獄。如・病・得・差。如・闇・見・明。如・慈・母・得・子。如・遠・行・人・得・婦。如・寡・女・得・夫。如・瞽・人・得・行。如・貧・人・得・衣。如・寒・人・得・火。如・耕・田・人・得・穀。如・盲・人・得・視。如・聾・人・得・聽。如・啞・人・得・語。有・如・是・種・種・思・之・念・之。仏・道・世・(至)・尊・終・不・相・欺。『大・正・藏』八・五・卷・一・三・三・三・頁</p>	<p>常・時、不・受・我・教、方・便・作・惡、是・則・大・癡。我・念・汝・等、何・日・忘・之、如・母・憶・子、無・有・息・時、仏・念・衆・生・亦・復・如・是。仏・語・阿・難、此・經・難・聞、若・未・聞・未・見・照・明・經・時、如・民・失・王、如・囚・在・獄、如・病・難・差、如・渡・失・船、如・母・失・子、如・子・失・母、如・鹿・失・群、如・魚・失・水、如・男・失・婦、如・女・失・夫、如・寒・失・火、如・貧・失・衣、如・弥・猴・失・樹、如・犢・子・失・母、如・是・種・種、何・日・忘・之、是・以・之・故、思・之・念・之。仏・念・衆・生、亦・復・如。</p> <p>(二〇七)一四行</p> <p>仏・言、若・有・善・男・子・善・女・人・等・及・四・部・衆・比・丘・比・丘・尼・優・婆・塞・優・婆・夷・等、若・有・得・聞・此・照・明・經・者、如・民・得・王、如・囚・出・獄、如・病・得・差、如・渡・得・船、如・母・得・子、如・子・得・母、如・寒・得・火、如・貧・得・衣、如・魚・得・水、如・鹿・得・群、如・男・得・婦、如・女・得・夫、如・弥・猴・得・樹・如・犢・得・母、如</p>

<p>下二九～二三三四頁上一四)</p> <p>如母得子病 殺生求魔神 不得一言福</p> <p>《大正藏》八五卷一三三五頁上一五)</p> <p>燒香請道人 不經八難苦 皆由宝車經</p> <p>《大正藏》八五卷一三三五頁中一四)</p>	<p>遠行得婦。如是種種思想心莫忘之。仏念衆生、亦復如是。</p> <p>(二二二～二二八行)</p>
	<p>燒香請道人：閑(便求魔神)(二〇行)</p> <p>(不)經八難苦 皆由此尊經(九行)</p> <p>仏道巨思義 方便隨宜説(八行)</p>

凡例(同一文は傍線で示す、類似文は傍点で示す。)

とあるが、分析して見よう。

A. 類似表現、種々様々な譬喩をもつて自経を聴く功德と利益を強調すること。

① 『妙好宝車経』には「一切病人思得差不」「如病得差」とあり、『照明菩薩経』にも「如病難差」「如病得差」とほぼ同様の表現が見られる。

② 『妙好宝車経』には「切獄囚思得出不」「如囚出獄」とあり、『照明菩薩経』にも「如囚在獄」「如囚出獄」とほぼ同様の表現が見られる。

③ 『妙好宝車経』には「如民得王」とあり、『照明菩薩経』にも「如民失王」「如民得王」とほぼ同様の表現が見られる。

④ 『妙好宝車経』には「如母憶子」「譬如慈母思見子不」「如慈母得子」とあり、『照明菩薩経』にも

『照明菩薩経』と『妙好宝車経』について(林)

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

六

「如母憶子、無有息時」「如母失子、如子失母」「如母得子、如子得母」と類似した表現が見られる。

⑤ 『妙好宝車經』には「譬如寡女思得夫不」「如寡女得夫」とあり、『照明菩薩經』にも「如男失婦、如女失夫」と「如男得婦、如女得夫」と類似した表現が見られる。

⑥ 『妙好宝車經』には「譬如貧人思得衣不」「如貧人得衣不」とあり、『照明菩薩經』にも「如貧人失衣」「如貧人失得衣」と類似した表現が見られる。

⑦ 『妙好宝車經』には「譬如寒人思得火不」「如寒人思得火」とあり、『照明菩薩經』にも「如寒人失火」「如寒人得火」と類似した表現が見られる。

⑧ 『妙好宝車經』には「譬如人遠行思早帰不」「譬如遠行人得帰」とあり、『照明菩薩經』にも「如遠行得帰」と類似した表現が見られる。

⑨ 『妙好宝車經』には「如是種種思之念之。仏道至尊終不相欺」とあり、『照明菩薩經』にも「如是種種…思之念之…仏念衆生、亦復如是」とほぼ同様の表現が見られる。

B. 現生の福を道人に求め、八難を避けて、現生の福を生じることができるのは魔神に求めるのではなく、本経を信じる功德である。

① 『妙好宝車經』には「殺生求魔神」「焼香請道人」とあり、『照明菩薩經』にも「焼香請道人…閑（便求魔神）」とほぼ同様の表現が見られる。

② 『妙好宝車經』には「不経八難苦 皆由宝車經」とあり、『照明菩薩經』にも「（不）経八難苦 皆由此尊經」と同様の表現が見られる。

以上を分析すると、その同様の表現あるいは類似した表現が多箇所見られることには両経の深い関係があることは間違いないだろう。その先後関係はどうなるのか、次に分析してみたい。

(二) 両経の偈頌の通韻

A. 両経ともに『八師経』偈を引用している。

『照明菩薩経』は『八師経』の第一の師の「不殺偈」と第六の師「畏老偈」を引用しているが、そのまま引用ではなくて、改めた箇所が見られる。ここでは一箇所を上げてみよう。

① 『八師経』の第六師の「畏老偈」と『照明菩薩経』偈

『八師経』

『照明菩薩経』

吾念世無常、人生要当老。(上声皓韻)
盛去日衰羸、形枯而白首。(上声有韻)
憂勞百病生、坐起愁痛惱。(上声皓韻)
吾用畏是故、棄家行学道。(上声皓韻)

吾念世無常、人生要当老。(上声皓韻)
盛去日衰羸、形枯如百草。(上声皓韻)
憂勞百病生、坐起懷煩惱。(上声皓韻)
吾欲畏是故、出家行学道。(上声皓韻)

〔大正藏〕十四卷九六五頁下

(一五〇一八行)

この対照表からみると、一見して両偈はほぼ同じであることがわかるであろう。両者の密接な関係があることが明白である。しかし若干相違がある。

『照明菩薩経』と『妙好宝車経』について(林)

まず、『照明菩薩經』は、『八師經』の偈の第六句の「愁痛惱」を「懷煩惱」にかえてある。『八師經』の「愁痛惱」はどのように読むのだろうか。そのまま「愁痛、悩む」に読むのか、あるいは「痛悩を愁ふ」に読むのか、なかなか読みにくいのである。逆に、『照明菩薩經』は「愁痛悩」を「懷煩惱」に改めて、「煩惱を懷く」と読みやすくしている。そうすると、一般の人々(庶民)にとつて理解しやすいのではないだろうか。

第二は、『八師經』の偈の第七句の「用」を『照明菩薩經』の「欲」に改めた。どうしてそのように変わったのか。古漢語の用法によれば、「用」の古漢字としての用法は「以」(もって)の意である。この用法は漢・魏・晋の時代によくあるが、しかし六朝後期以降はこの用法は余り見えない。一般の人々にとっては知らない用法である。

第三は、『八師經』の偈の第八句の「棄家」を『照明菩薩經』の「出家」に改めた。なぜならば、「棄家」、家を棄てる、これは家をいらぬイメージが強いから、逆に「出家」は、家から出てきて、これは世俗の生活をそんなに強い否定ではないから、一般の人々にとつて受けられるように、撰者は、そのように考えたのではないだろうか。

最後、『八師經』の偈の第四句の「而白首」を『照明菩薩經』の偈の第四句の「如百草」に改めた。なぜ『照明菩薩經』の撰者がそのように改めたのだろうか。『照明菩薩經』の撰者において韻律の配慮は意図的に行われていることではないか。「而白首」の「首」は上声有韻であるが、「如百草」に改めると、「如百草」の「草」は上声皓韻であるから、偶句の二・四・六・八句は全部上声皓韻になる。従つて、『照明菩薩經』の撰者は『八師經』の偈頌以上に押韻のために改めることが明らかになっている。

② 『八師經』の第八師の「畏死偈」と『妙好宝車經』の偈

我惟老病死、三界之大患。(去声諫韻)
福盡而命終、氣絶於黄泉。(平声先韻)
身爛還為土、魂魄隨因縁。(平声先韻)
吾用畏是故、学道昇泥洹。(平声先韻)

唯念老病死、三界是大患。(去声諫韻)
福盡而命終、棄之於皇泉。(平声先韻)
身爛還帰土、魂魄隨因縁。(平声先韻)
吾欲畏是故、求道勝泥洹。(平声先韻)

〔『大正藏』十四卷九六六上〕

〔『大正藏』八五卷一三三五頁上〕

この対照表からみると、両偈はほぼ同じであり、若干相違いが、特に、『八師経』偈の第二句の「患」は去声諫韻であり、『妙好宝車经』偈の第二句は「患」の去声諫韻のまままで改めなかった。従って、この『妙好宝車经』の偈については、撰者において『八師经』の偈頌以上に押韻のために改めることが明らかになっていない。

B. 両经偈の押韻

經典偈に押韻の關係からみると、齊藤先生の研究²⁴によれば、漢訳經典の、押韻は実に少ない、5%ほど占めるが、不入藏の中国撰述經典では五十部有偈經典の中に十六部が押韻している。そのなかに『照明菩薩经』と『妙好宝車经』を含めている。『照明菩薩经』の合韻率は約80%となり、『妙好宝車经』は約71%となっている。さらに韻律(句末の押韻と句中の平仄)を具えるものが撰述年代に推定することができるという。

『照明菩薩经』と『妙好宝車经』について(林)

① 『照明菩薩經』

『照明菩薩經』の撰述年代については、落合教授が『照明菩薩經』を五世紀初頭から六世紀後半までの間に中国で成立したものであると推定したが、韻律（句末の押韻と句中の平仄）側から傍証することになる。九三～九四行に

色白不過雪（入声質韻） 色黒不過漆（入声質韻）

人貴不過王（平声東韻） 味貴不過蜜（入声質韻）

此照明經者（上声馬韻） 經中最第一（入声質韻）

十二部經中（平声陽韻） 照明經第七（入声質韻）

とあるが、齊藤先生が以下三点を指摘している。

a、この『照明菩薩經』偈は、押韻だけではなく、二四不同も万全であるから、本經の成立が南北朝中葉以前に遡りえないことが知れる。特に二四不同は五世紀末から確定していく。

b、首聯（第一・二句）と領聯（第三・四句）には対句を用いていることから、詩の条件を具えているといえるが、近体詩の格律に照らすとき、奇数句末に平声（第三句の王・第七句の中）が用いられ、また粘法・反法に準拠していないので、やはり五世紀末以降に成立したものと想定できるのである。

c、尾聯に「十二部經中 照明經第七」の「七」（入声質韻）は韻を配慮しようとする意図である。

よって、齊藤先生が『照明菩薩經』の偈頌の句末の押韻と句中の平仄と粘法・反法に至っていないことなどによって、推定した『照明菩薩經』の撰述年代と落合教授の推定したものとはほぼ一致していることが明らかである。

② 「妙好宝車經」

胡適（二八九—一九六二）はかつて「妙好宝車經」についての手稿を起草し、本經の偈については、「この種の韻文は中古時代にあつては非常に流暢なものであるといえる」と述べている。²⁶ 本經にはまとまった偈が二箇所に見られるが、ここに一箇所を挙げてみよう。

如母得子病 殺生求魔神（平声真韻）

不得一言福 罪如須弥山（平声山韻）

……（中略）……

眼老不見色 看經文字難（平声寒韻）

耳老不聞聲 聽受經法難（平声寒韻）

鼻老不聞香 分別香亦難（平声寒韻）

口老不能語 說經義亦難（平声寒韻）

心老多忘失 說法解義難（平声寒韻）

身老不能行 往取福德難（平声寒韻）

今身不受戒 後得為人難（平声寒韻）

殺生短命報 欲求長命難（平声寒韻）

我殺還我尚 走避脫亦難（平声寒韻）

世間愚癡人 不信宝車經（平声青韻）

放恣著五欲 行業之所牽（平声先韻）

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

譬如歴養馬	拳頭看青雲（平声寒韻）
但作地獄行	不知念生天（平声先韻）
智者樂福德	愚者利養身（平声真韻）
如馬貪水穀	好語詠不聽（平声青韻）
展轉鑊湯中	苦痛難可陳（平声真韻）
*□□□□□□	出復緣刀山（平声刪韻）
下復上劍樹	語我家中人（平声真韻）
欲求過度我	燒香請道人（平声真韻）
不經八難苦	皆由宝車經（平声青韻）
心直事事直	心曲直事難（平声寒韻）
魚鱉隱在海	掃地求活難（平声寒韻）
猿猴急依樹	無樹脫亦難（平声寒韻）
人急依於仏	無戒求仏難（平声寒韻）
放身自縱恣	衆魔競來前（平声先韻）

（『大正藏』八五卷一三三五頁上〜下）

*（一）内の三句は天王寺出口常順氏藏本によって補入したもの。

とあるが、まず、齊藤先生が以下のように指摘している。

a、すべて平声によって押し、その韻字は語尾がみな鼻子音の「ㄣ」や「ㄨㄥ」で収束する陽声韻である。撰者において韻字の配慮は意図的に行われていることは瞭然としているという。

b、この偈は最後のほうで押韻しなくなるので、逆に最終句「衆魔競來前」から前方に押韻に確認していくと、「苦痛難可陳」と「語我家中人」との間に三句ほど脱落しており、もとは七二句の構成であったという。

bについては、天王寺出口常順氏藏本によれば、三句を脱落したことが明らかになっているが、順番は「苦痛難可陳」と「語我家中人」との間ではなく、「展轉鏝湯中」と「苦痛難可陳」との間である。齊藤先生がほぼ正しく推測されている。よって、テキストの校讎と原初形態の復元は実現可能であることは確かである。

次に、偶数句末「難」が十四箇所であることは、偈頌の偶数句末を、同一韻字によって詩の押韻体系に接近したものの、早く東漢・三国の訳に現れる偈頌に似ているものである。

東漢の曇果・康孟祥訳『中本起経』と

外道所修事 精懃火為最 (去声泰韻)

学問日益明 衆義通為最 (去声泰韻)

人中所帰仰 遮迦越為最 (去声泰韻)

江河泉源流 大海深為最 (去声泰韻)

衆星列空中 日月明為最 (去声泰韻)

仏出於世間 受施為上最 (去声泰韻) (『大正藏』四卷一六三頁中)

三国の呉支謙訳『太子瑞応本起経』

久得在屏處 思道其福快 (去声卦韻)

昔所願欲聞 今以悉知快 (去声卦韻)

不為彼所憐 能安衆生快 (去声卦韻)

度世三毒滅 得仏泥洹快 (去声卦韻)

『照明菩薩経』と『妙好宝車経』について (林)

生世得睹仏　聞受經法快（去声卦韻）
得與辟支仏　真人會亦快（去声卦韻）
不與愚從事　得離惡人快（去声卦韻）
有點別真偽　知信正道快（去声卦韻）（『大正藏』三卷四七九頁下）

齊藤先生の研究成果によれば、偈頌の通韻と近体詩の格律から見て、兩經の前後関係は明らかである。即ち、『照明菩薩經』の偈頌は二四不同も万全で、首聯（第一・二句）と頌聯（第三・四句）に對句を用い、また近体詩の格律に照らすとき、奇数句末に平声を用いており、詩の条件を具えているといえる。しかし、『妙好宝車經』にはそのような特色が見られない。さらに、同一字の押韻体系が用いられることは早く東漢・三国の訳經典の影響が明らかにされている。従って、偈頌の押韻と近体詩の格律から見ても『照明菩薩經』の成立は『妙好宝車經』よりもやや遅いのではないだろうか。

（三）兩經の前後関係

前述の類似点から見ると、兩經の先後関係が、明らかになつてくる。すなわち、『妙好宝車經』が先に成立して、『照明菩薩經』は後の時代に成立されたことが推定される。その根拠は、まず、經録のなかに、『妙好宝車經』は僧祐の『出三藏記集』に記録されているが、『照明菩薩經』の經録初出は『法經録』（五九四）の「衆經偽妄」である。

次に、『照明菩薩經』の偈頌は押韻だけではなく、二四不同も万全であり、首聯（第一・二句）と頌聯（第三・四句）に對句を用いて奇数句末には平声を用いている。詩の条件を具えているといえるが、『妙好宝車經』はそ

ここまで至っていない。従って、偈頌の通韻と近体詩の格律から見ても、『妙好宝車経』より『照明菩薩経』の方が後に成立したものといえるだろう。

最後に、典拠とした経論からみると、『妙好宝車経』が典拠とする経論である三国呉の『八師経』と三世紀の訳の『法句経』などがある。また鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』は後秦弘始八年（四〇六年）である。『照明菩薩経』も『八師経』は引用しているが、後代に訳した經典から引用された可能性がある。すなわち、翻刻文二〇～二二行の「心轉作意、意轉作識；轉入眼、眼轉入耳、耳轉入鼻、鼻轉入口、口轉入身、身轉入心」の箇所は高齊天竺三藏那連提耶舍訳『大方等大集経』六十卷（六世後半）の影響を受けている可能性がある。これを仮に認めると南北朝の後期、隋朝開始の数十年もしくは十年前後に成立したことになる。しかし、その点について詳しく考察する時間的余裕がなかったので、この問題は今後の課題としたい。

五、終わりに

以上考察したうえで、以下の点が明らかになってきた。

まず、『妙好宝車経』のテキストは写本の書道博物館蔵本・四天王寺出口常順氏蔵本・ペリオ本・俄蔵本と活字本の『大正蔵』本の五つである。『妙好宝車経』の撰述年代は長房録に書かれているによって齊武帝世の四八二年から四九三年までに撰述されたとみることが可能である。少なくとも僧祐『出三蔵記集』の天藍年間五一〇年から五一五年までを本経の下限と確定することできる。『妙好宝車経』の撰者は南朝劉裕第四子彭城王義康（四〇九～四五二）の第六子曇辯と本経の撰者と同じ人物であると蔡榮婷女史が判断しているが、そのようには判断し難いと筆者には思われる。

『照明菩薩経』と『妙好宝車経』について（林）

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について(林)

六

次に、『照明菩薩經』と『妙好宝車經』には同様の表現或は類似した表現の経文が多くあり、また、両経はともに人天教経典であり、庶民経典であり、中国撰述経典であり、さらに、両経は支謙の訳した『八師経』の有韻偈文を引用している。このことから両経の間には深い関係のあることが明らかである。

最後に、経録、韻律に対する配慮、そして影響を受けた経典の翻訳した年代によって、『妙好宝車經』より『照明菩薩經』の方が後に成立したものと推察した。

注

- (1) 拙稿『『照明菩薩經』と『八師経』について』(『印度学仏教学研究』第五三卷第二号。二一九～二二〇頁。二〇〇五年三月)
- (2) 拙稿「李盛鐸旧蔵『照明菩薩經』の解題・翻刻」(『仙石山論集』第一号。七九～一一三頁。平成一七年)
- (3) 牧田諦亮著『疑経研究』(京都大学人文科学研究所。一九七六年)
- (4) 中村不折著『禹域出土墨宝書法源流考』卷中。二七頁。西東書房。昭和二年。中村不折氏は「仏説妙好宝車經一卷…首欠。六紙。長八尺九寸。隸書。敦煌ヨリ出ヅ。」と記し、跋文の二行の写真
「大業十三年仏弟子張仏果爲劉士章善友知識敬造宝車經一卷流通誦講説修行願藉此大乘弘化之」
を載せている。また「此書風優雅豊勻。跋文ノ細字殊に妙ナリ。」と評している。
- (5) 藤枝晃編『出口常順蔵トルファン出土仏典斷片録』一三三二頁。「宝車菩薩經・觀世音折刀除罪經 合卷(7/10)」。
法蔵館。昭和五三年。

- (6) 藤枝晃博士編の『トルファン出土仏典の研究——高昌殘影積録』一五七頁。法藏館。二〇〇五年。
- (7) 『法國國家圖書館藏敦煌西域文獻』七卷。一五八—一五九頁。上海古籍出版社。一九九八年。
- (8) WU CHI-YU "Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang." PARIS BIBLIOTHÈQUE NATIONALE 1970. pp 100-101.
- (9) 黃永武主編『敦煌寶藏』一一五冊。五三六頁。台灣新文豐出版公司。
- (10) 『俄藏敦煌文獻』(上海古籍出版 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所俄羅斯科學出版社東方學部。⑦分冊。三九頁。注16に蔡榮婷の研究によって存知したものである)。
- (11) M. И. ВОРОБЬЕВА-ДЕСЯТОВСКАЯ, "ОПИСАНИЕ КИТАЙСКИХ РУКОПИСЕЙ ДУНЬХУАНСКОГО ФОНДОВ ИНСТИТУТА АЗИИ Восток 1" ИЗДАТЕЛЬСТВО ВОСТОЧНОЙ ЛИТЕРАТУРЫ Москва 1963. 394.
- 孟列可夫著袁席箴・陳華平訳の『俄羅斯所聖彼得堡分所藏敦煌文寫卷叙録』上冊。四〇〇頁。上海古籍。一九九九年。
- (12) 人天教というのは、中国六朝の劉虬が、釈迦の成仏後の最初説法から入滅までの教説を頓悟・五時・七階と判定した上で、『提謂波利經』の中の提謂 (Trapusa) と波利 (Bhalika) への説法を最初説法として在家者を対象とした世俗のための説教である。五戒を持すれば人身を得、十善を修すれば天に生まれる。極悪の者は地獄に墮ち、中悪の者は餓鬼道に墮ち、劣悪の者は畜生道に墮ちる。これらの三世業報と善悪因果を説いたものである。人天教に關しての先学の研究は、湯用彤先生の『漢魏兩晋南北朝仏教史』第二分第九章の「北方之禪法淨土与戒律」の「五戒十善人天教」(八一—八二頁)と塚本善隆博士の「中国の在家仏教特に庶民仏教典——提謂波利經の歴史——」(『塚本善隆著作集』第二卷「北朝仏教研究」。大東出版社。昭和四九年)がある。
- (13) 『塚本善隆著作集』第二卷「北朝仏教史研究」二〇一—二〇二頁。大東出版社。一九七四年。塚本善隆博士が、『北朝仏教史研究』の中に「中国の在家仏教特に庶民仏教の一經典——提謂波利經の歴史——」で指摘している。北魏時代、『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について(林)

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について(林)

九〇

泰山に近い地方で撰述せられた『宝車經』は、「諸の衆生を教えて普く皆、三歸五戒十善八齊即ち在家の戒を受持せしめよ」と説かれたとするものであって、これを受持すれば、天に受樂無窮なるべく、これに反対すれば、地獄の苦をうけること極まりなしとし、そして、地獄や死後の審判庁が東泰山と結びつけられている。中国泰山信仰に仏教の地獄や応報轉生の信仰を結びつけたものであるという。

(14) 注3 一三五―一三八頁に、牧田諦亮博士は『疑經研究』の中で『宝車經』のテキストと内容を詳しく考察しているが、特に以下の四点を指摘している。

① 道安(三二四―三八五)の疑經録以後、江南にあった僧祐(四四五―五一六)の周辺にあらたに見出だされた疑經であり、北国淮洲の比丘曇辯が撰述した。

② 『宝車經』の宝車菩薩の名は、おそらく法華經譬喻品にいう「肥壯多力」の大白牛のひく宝車から出たもの。しかしその説教は必ずしも法華經をうけたものではないが、法華經・維摩經の語を転用している。

③ 受戒第一を提唱する『宝車經』は、同じ北魏時代の中国撰述經典である提謂經・淨度三昧經或はほぼ同時代の仏説救疾經などと同様に在家信教徒を対象として説かれたものとして考察すべきものである。

④ 最後に附された縁起によれば、これは敦煌出土の変文に見られる作風であり、物語風の擬體がすでに早くこの北魏の中国撰述經典につけかわえられたものである。

(15) 鎌田茂雄著『中国仏教史』第四卷二〇三―二〇四頁。東大出版会。一九九〇年。

(16) 蔡榮婷「敦煌本『仏説妙好宝車經』研究」、『新世紀敦煌論集』四二九―四五二頁。巴蜀書社。二〇〇三年) 女史は本經の文字面から研究されている。本經に関するテキストを詳しく紹介し、俄藏本とペリオ本と『大正藏』本とを詳しく比較している。以下の点を指摘している。

① 南朝劉裕第四子の彭城王義康(四〇九―四五二)の第六子曇辯と本經の撰者は同じ人物である。

- ② 本経は『妙法蓮華経』の「牛車」の姿を運用して、持戒すれば、天に登ることができる。
- ③ 傳大士頌を表れることは『宝車経』の影響を宗教側面から文学側面に浸透していたという。
- (17) 中国近代人物文集叢書『胡適學術文集中国仏教史』(中華書局。一九九七年)五九二頁に、「這是五世紀末葉出来的一部偽経」、「這種韻文、在中古時代、可算是很流暢的」とある。
- (18) 注16の①参照。
- (19) 僧祐撰『出三藏記集』に「新法華経七卷(弘始八年夏於長安大寺訳出)」(『大正藏』五五卷十頁下)
- (20) 注2、四三四頁。
- (21) 前注15、二〇四頁。
- (22) 僧祐撰『出三藏記集』(『大正藏』五五卷七頁上)
- (23) 僧祐撰『出三藏記集』に「法句経二卷。右一部。凡二卷。魏文帝時。天竺沙門維祇難。以吳主孫權黃武三年齋胡本。武昌將炎共支謙訳出」(『大正藏』五五卷六頁下)
- (24) 齊藤隆信「漢語仏典における偈の研究——中国撰述経典における偈の韻律とその意義」(『仏教史研究』二〇〇五年五月)と「漢語仏典における偈の研究——有韻偈——」(『仏教学浄土学研究』三三三〜五十頁。永田文昌堂。二〇〇一年。京都)と「漢語仏典中偈の韻律与『演道俗業経』」(『法源』第十八期。中国仏学院。二〇〇〇年)など参照。
- (25) 落合俊典「李盛鐸旧藏照明菩薩経探蹟」(『仏教学浄土学研究』一三三〜三二頁。永田文昌堂。二〇〇一年。京都)と「羽田亨稿『敦煌秘笈目録』簡介」(『敦煌文献論集』九一〜一〇一頁。遼寧出版社。二〇〇一年)と「李盛鐸と敦煌秘笈」(『印度学仏教学研究』第五二卷第二号。一六六〜一七二頁。平成十六年三月)参照。
- (26) 注17。
- (27) 高齊天竺三藏那連提耶舍訳『大方等大集経』六十卷に「仏言。汝心未起時。中有五百四十八愛行。心轉作意。中有『照明菩薩経』と『妙好宝車経』について(林

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林）

九

五百四十八愛行意轉作識。中有五百四十八愛行。轉入眼。眼所見好色。中有五百四十八愛行。眼所見中色。中有五百四十八愛行。眼所見惡色。中有五百四十八愛行。轉入耳。耳所聞好聲。中有五百四十八愛行。耳所聞中聲。中有五百四十八愛行。耳所聞惡聲。中有五百四十八愛行。轉入鼻。鼻所聞好香。中有五百四十八愛行。鼻所聞中香。中有五百四十八愛行。鼻所聞惡臭。中有五百四十八愛行。轉入口。口所得好味美好語言。中有五百四十八愛行。口所得中味中語言。中有五百四十八愛行。口所得惡味惡語言。中有五百四十八愛行。轉入身。身所得好細軟可身。中有五百四十八愛行』（『大正藏』十三卷四〇六頁中二六〜下十四）とあるが、牧田諦亮博士は『疑經研究』に、『大方等大集經』六十卷、五九卷は高麗版（『大正藏』）が高齊天竺三藏那連提耶舍訳とし、宋版では後漢天竺三藏安世高訳としていると指摘している（九六〜九七頁）、さらに詳しい検討を要する。

参考資料

- 1 牧田諦亮著『疑經研究』。京都大学人文科学研究所。一九七六年。
- 2 牧田諦亮監 落合俊典編「七寺古逸經典研究叢書『中国日本撰述經典（其之五）・撰述書』」。大東出版社。二〇〇〇年。
- 3 中村不折著『禹域出土墨宝書法源流考』巻中。二七頁。西東書房。昭和二年。
- 4 藤枝晃編『出口常順藏トルファン出土仏典斷圖片録』二二二頁。法藏館。昭和五三年。
- 5 藤枝晃博士編『トルファン出土仏典の研究——高昌殘影積録』一五七頁。法藏館。二〇〇五年。
- 6 『法国国家圖書館藏敦煌西域文獻』七卷。一五八〜一五九頁。上海古籍出版社。一九九八年。
- 7 WU CHI-YU "Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang." PARIS BIBLIOTHEQUE NATIONALE 1970.
- 8 黄永武主編『敦煌寶藏』一一五冊。五三六頁。台灣新文豐出版公司。
- 9 『俄藏敦煌文獻』⑦分冊。三九頁。上海古籍出版社。俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所俄羅斯科学出版社東方学部。

一九九八年。

- 10 M. И. ВОРОБЬЕВА-ДЕСЯТОВАЯ, "ОПИСАНИЕ КИТАЙСКИХ РУКОПИСЕЙ ДУНЬХУАНСКОГО ФОНДОВ ИНСТИТУТА АЗИИ Восток 1" ИЗДАТЕЛЬСТВО ВОСТОЧНОЙ ЛИТЕРАТУРЫ Москва 1963. 394.

孟列可夫著袁席箴・陳華平訳『俄羅斯所聖彼得堡分所藏敦煌文写卷叙録』上冊。四〇〇頁。上海古籍出版社。一九九九年。

- 11 劉虬撰『無量義經序』(『大正藏』九卷三八三頁中～三八四頁上)

- 12 湯用彤著『漢魏兩晋南北朝佛教史』。八一～一八七頁。弥勒出版社。一九八二年。

- 13 塚本善隆「中国の在家仏教特に庶民仏教典——提謂波利經の歴史——」(『塚本善隆著作集』第一卷「北朝仏教史研究」二〇一～二〇二頁。大東出版社。一九七四年)

- 14 鎌田茂雄著『中国仏教史』第四卷二〇三～二〇四頁。東大出版会。一九九〇年。

- 15 蔡榮婷「敦煌本『仏説妙好宝車經』研究」(『新世紀敦煌論集』四二九～四五二頁。巴蜀書社。二〇〇三年)

- 16 中国近代人物文集叢書『胡適學術文集中国仏教史』。五九二頁。中華書局。一九九七年。

- 17 僧祐撰『出三藏記集』(『大正藏』五五卷)

- 18 落合俊典「李盛鐸旧藏照明菩薩經探蹟」(『仏教学浄土学研究』一三三～一三三頁。永田文昌堂。二〇〇一年。京都)

- 19 落合俊典「羽田亨稿『敦煌秘笈目錄』簡介」(『敦煌文獻論集』九一～一〇一頁。遼寧出版社。二〇〇一年)

- 20 落合俊典「李盛鐸と敦煌秘笈」(『印度学仏教学研究』第五二卷第二号。一六六～一七二頁。平成十六年三月)

- 21 齊藤隆信「漢語仏典における偈の研究——中国撰述經典における偈の韻律とその意義」(『仏教史研究』二〇〇五年五月)

- 22 齊藤隆信「漢語仏典における偈の研究——有韻偈——」(『仏教学浄土学研究』三三三～三三三頁。永田文昌堂。二〇〇一年。

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について(林)

『照明菩薩經』と『妙好宝車經』について（林

京都）

九四

- 23 齊藤隆信「漢語仏典中偈の韻律与『演道俗業經』」（『法源』第十八期。中国仏学院。二〇〇〇年）
- 24 高齊天竺三藏那連提耶舍訳『大方等大集經』六十卷（『大正藏』十三卷四〇六頁中二六〜下一四）
- 25 拙稿「『照明菩薩經』と『八師經』について」（『印度学仏教学研究』第五三卷第二号。二一九〜二二〇頁。二〇〇五年三月）
- 26 拙稿「李盛鐸旧蔵『照明菩薩經』解題・翻刻」（『仙石山論集』第一号。七九〜一一三頁。平成一七年）

that the Zpj has better rhythm and rhyme patterns 韻律 than the Mbj. The Zpj may have also been influenced by the **Mahāvaiṣṭyamaśāstra-sūtra* 大方等大集經 (Vol. 60) translated by Narendrayāśas 那連提耶舍 in the latter half of the 6th century.

Of the two texts discussed in this paper, the Mbj seems to be the earlier. The Mbj is clearly an apocryphal text which absorbed from the Bsj, the *Saddharmaṇḍarīka-Sūtra* and the *Dharmapada* 法句經 those elements which best suited Chinese customs, beliefs, language, and way of thinking. The Zpj was composed later and apparently relied upon the Mbj.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

scriptures and suspicious texts' 新集疑經偽撰雜錄 in Sengyou's 僧祐 *Chu sanzang jiji* 出三藏記集 (T55. 39a27-29), the Mbj was compiled during the Northern Dynasties by Tanbian 曇辯 of Huai Province 淮州 and revised by the monk Daosi 道侍. Until its discovery at Dunhuang, this text had been considered lost. The colophon of the Dunhuang manuscript is dated year 16 of the Daye 大業 Era (617C. E.) of the Sui 隋 Dynasty. In the Taishō edition, the Mbj has one scroll 一卷 and contains about 2,800 Chinese characters. The text follows the traditional structure of a sutra consisting of three parts, i.e., preface 序分, main part 正宗分, and concluding part containing the urge to spread the teachings of the scripture 流通分. The main 'characters' of the text are Bodhisattva Baoche 寶車菩薩, the Buddha 佛, monks 比丘, and the brahmins 婆羅門.

Here are the main teachings of the Mbj: the Buddha's Path is supreme; the duration of Tathāgata's life is beyond comprehension 不可思議; if one has faith in this scripture, one will gain various worldly benefits 現世利益; if one takes the three refuges 三歸依, observes the five precepts 五戒 and the ten goods 十善, undertakes the eight abstinences on fast-days 八齋 and repents 懺悔 whole-heartedly for one's sins, understands the law of cause and effect 因果, takes the carts of the Three Vehicles 三乘 and leaves 'the burning house 火宅 of the three realms 三界', one will not fall in Hell (which is identified as Mt Tai in the East 東泰山). Moreover, if one makes use of Wisdom 般若 and skilful means 方便 to liberate the mind of all sentient beings enmeshed in greed and ignorance and generates the thought of Awakening 菩提心, then one will drive in the great ox-cart of the One Vehicle 一乘大牛車 and will reach the true realm of Nirvana.

The Zpj and the Mbj were clearly influenced by the *Saddharmapundarika-sūtra* 妙法蓮華車經. In both texts, we see fragments which are either similar or identical with the text of the Lotus Sutra. As already mentioned, both the Zpj and the Mbj also contain verses from the Bsj, though the way in which they include and word them are different. The analysis of the versification reveals

Summary

On the *Zhaoming Pusa Jing* 照明菩薩經 and the *Miaohao Baoche Jing* 妙好寶車經

LIN Min

This paper discusses the relation between the *Zhaoming pusa jing* (hereafter, Zpj) and the *Miaohao baoche jing* (hereafter, Mbj). As I have shown in a recent contribution (*Journal of Indian and Buddhist Studies*, 53 (2): 219-21), the Zpj was clearly influenced by the *Ba shi jing* (hereafter, Bsj) 八師經, a text translated by Zhi Qian 支謙 in the 3rd century C. E. Verses 偈頌 from the Bsj can also be found in the Mbj.

The Zpj has survived in only one version, i.e., a Dunhuang manuscript originally belonging to Li Shenduo's 李盛鐸 collection. The whereabouts of the manuscript are uncertain, but photocopies of the text were published in *A Collection of Xiyu Unearthed Artifacts by Dr. Toru Haneda* 羽田亨博士收集西域出土文獻寫真 kept in the Haneda Museum 羽田記念館. On its basis, I published a diplomatic edition in the previous issue of the *Sengokuyama Journal of Buddhist Studies* (Vol. 1, 2004).

The Mbj has five extant versions: (1) manuscript kept in the Calligraphy Museum 書道博物館 in Tokyo (originally belonging to Nakamura Fusetsu 中村不折); (2) manuscript in the collection of Deguchi Jōjun 出口常順 (former abbot of Shitennō Temple 四天王寺 in Osaka); (3) Dunhuang manuscript in Pelliot Collection (P2758v); (4) Dunhuang manuscript in the St Petersburg Collection (No. 00666); (5) and the Taishō Canon edition (Vol. 85).

The Mbj is also known under the following titles: *Baoche jing* 寶車經, *Baoche pusa jing* 寶車菩薩經, *Fo shuo miaohao baoche jing* 佛說妙好寶車經, and the *Miaohao baoche pusa jing* 妙好寶車菩薩經. According to 'the miscellaneous catalogue [section] containing newly collected apocryphal